

介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要 利用者氏名：S.T 様(100歳 女性 介護度 5)
利用期間：平成30年4月～現在(長期入所ご利用)
病名：心不全・完全房室ブロック ペースメーカー埋め込み 緑内障

経過：他施設ショートステイ中、心不全の悪化有り近隣の病院に緊急入院。その後、療養型病院を経て、以前、ご主人が当施設を利用されていた経緯がありご家族の希望で転所となった。ご入所時ADL全介助。寝たきりの状態。いつ死んでもいいとネガティブな発言が多かった。

内 容

ご入所時はADL全介助で、心不全後の体調がなかなか戻らず、ご自分で何も出来なくなったことを悲観し「もう年だからいつ死んでもいい」とネガティブな発言が多く聞かれていました。また今までの急性期病院や療養型病院で寝たきりとなり、ベッド上で楽しみもなく過ごされていたこともあり、意欲がみられませんでした。

しおさいにご入所後、毎日職員がお声掛けをし続け、個別リハビリだけでなく、集団レクリエーションや体操など、離床して過ごす機会を多く持っていただきました。すると、前向きなお気持ちを取り戻し、「皆さんに、こんなに良くしてもらって嬉しい。この歳まで生きている事には意味があるはずだから頑張りたい。皆さんに迷惑をかけずに出来る事は自分で行いたい」とのお気持ちが聞かれるようになりました。また「ここの食事はおいしいし、ここは同世代の人たちが一生懸命自分の事は自分で行っている。負けなようにがんばりたい」ともおっしゃっていました。Sさんのご家族も当初は「おばあさんは歳だから、いつ逝ってもええ」などといった言葉が聞かれていましたが、お元気になった姿をみてとても喜ばれておりました。

Sさんが最初に掲げた目標は、「自分で車椅子を漕いで、話をしたい人のところへ行きたい」という目標でした。ご入所当時、長期間の入院生活による筋力低下に加え、緑内障による視野狭窄もあり、車椅子自走することに対してご本人の不安もありましたが、リハビリ職員や介護職員とリハビリを重ね、5メートル程度の自走が行えるようになりました。それにより、お話をしたい利用者さんのもとまで、ご自分で行けるようになりました。ひとつでも出来ることが増えると、次の目標を担当の職員と見つけるようになりました。

その繰り返しの中で、しおさいにご入所されて早2年半以上が経過され、先日百寿のお祝いを迎えました。コロナ禍ということもあり、お祝いのセレモニーは大体的に行えませんでした。町長の来設にとても

喜ばれ、「これまで生きてきて良かった」と話され、地域の新聞に掲載されると「有名人になったなあ」と照れ笑いしながら「こんなに長生きするのは意味があるんだと思ってきたけど、自分が頑張ることで、自分がみなさんの目標になったらええなあ」とおっしゃっていました。その笑顔はまさにキラキラとしたもので、ご入所前に一度は「もう死んでもええ」と諦めた方が、100歳になっても尚、ご自分の目標のみならず、ご自身が誰かの目標でありたいという前向きな考え方に変えることが出来、且つ、生きがいをもって過ごせる時間を提供できた症例となりました。

現在のSさんの目標は来年のしおさい文化展に作品を出すことだそうです。私たちは101歳のSさんを笑顔でお迎えするためにこれからも寄り添ったケアを届けたいと思います。